論稿

＜平成27年度長岡大学ＣＯＣ事業・地域志向教育研究成果＞

北越製紙と小林宗作
―長岡地域の産業史・企業家史に関する資料（Ⅲ）―

長岡大学教授　松　本　和　明

はしがき

筆者は、本誌『地域連携研究』の第１号（2014年11月発行）および第２号（2015年11月発行）において、北越製紙株式会社（現・北越紀州製紙）の経営発展と企業成長を1910年代から60年代初頭にかけて旺盛かつ積極的に主導した田村文吉の企業者活動および地域・社会貢献活動について、諸資料を収集して分析を加え、ひととおり明らかにすることができた。引き続き、長岡地域はもとより新潟県内外から、同社に関する資料を収集している。

本稿では、文吉はもとより、創業者である田村文四郎および覚張治平をミドルマネージャーさらにはトップマネジメントの一員として支え続けた技術者の小林宗作の活動ないし言動について明らかにすることを課題とする。小林は学卒入社の第１号の社員であり、工場や機械の新増設や運営・操業を中心に、後の1925年に入社する中村恒とともに技術面を統括した。

筆者は、2007年に刊行された『北越製紙百年史』の編纂事業への参画を許され、小林について調査をおこない、その果たした役割の重要性を認識し、一定程度叙述することはできたものの、社史としての性格上、立ち入って考察し言及することはできなかった。

そこで、本稿では、新たに収集できた資料を紹介し、解説ないし解題を施して、小林の足跡と事績および田村・覚張との関係について多面的に跡付けていくこととしたい。

小林や北越製紙の史実については、とくに指摘しない限り、前述の『北越製紙百年史』および『北越製紙７０年史』（1977年刊行）と『北越製紙株式会社二十五年史』（1932年刊行）に依拠している。

なお、資料には、読み易さに配慮して、適宜句読点の付加、段落分け等をおこなっていることをお断りしておく。

Ⅰ　生い立ちから1910年代にかけての足跡と活動

小林宗作は、1885（明治18）年10月25日に、新潟県北魚沼郡川口村（現・長岡市）の中林茂吉・ヒデの次男として生まれた（８人兄妹の２人目）。茂吉家は同村域の有力者である中林宗衛家の分家にあたる。ヒデの実家は同郡田麦山村（現・長岡市）の桜井長作家である。茂吉は農業や養蚕業に加えて郵便局を営むとともに村会議員や学務委員などを歴任した。宗作は、1907（明治40）年11月に古志郡東山村木沢（現・長岡市）の小林清家の養子となっている。

宗作の兄の長松は家業を継承した。弟の亀五郎は川口村の関金之丞家の養子となり農業とともに各種団体に関係した。弥平治は新潟県立長岡工業学校（現・長岡工業高校）を卒業後に新潟鉄工所に勤務し、刈羽郡柏崎町で鉄工業を営む西川家の養子となった。養父の藤助と西川鉄工所（現・サイカワ）の経営を主導するとともに、大河内正敏の知遇を得て、理研ピストンリングをはじめ小千谷・六日町・柿崎での関連会社の設立と経営に深く関与した。昭和戦前期から戦後にかけて新潟県会議員・県議会議長および参議院議員を歴任し、奥只見地域の開発を推進するなど、新潟県の保守政界の実力者であった。また、西川青年学校や県立柏崎工業学校（現・柏崎工業高校）、柏崎農業高等学校（現・柏崎総合高校）の創設に尽力するなど教育にも熱心に取り組んだ。田中角栄や品川英三と近しい間

柄であった。亀五郎は西川鉄工所の常務取締役も務めた[1]。友治は福島高等商業学校（現・福島大学）を卒業し、その後長岡市千手町の長部虎次郎家の養子となった。北越銀行本店営業部長などを経て、1958年に取締役経理部長、62年から70年まで常務取締役を務めた[2]。

小林は、村立川口小学校・川口尋常高等小学校を経て新潟県立長岡中学校（現・長岡高等学校）に入学した。田村文吉が同期生であった。学年があがるにつれて両者の交流が進み、交通が不便で自宅からの通学が難しく同校の寄宿舎に入っていた小林は度々文吉の自宅を訪れている。もとより田村文四郎とも面識を得たのはいうまでもない。小林は、同校時代の文吉について、「この頃から社交家というか、とにかく交際家でたくさんのお友達と、よくおつき合いされていたと記憶しております（中略）当時から友誼心に厚く、良く人の面倒をみられたので友達もたくさんできたということでしょうね」[3]と述懐している。

1904（明治37）年３月に長岡中学校を卒業した。同校の第９回卒業となり、総数は78名であった。主な同期卒業生としては、松田耕平（明治大学卒業後長岡市会議員・新潟県会議員を経て1938年から44年まで第６代長岡市長を歴任）や大関又次郎（黒条村長）、倉品広吉（与板町長）、平沢嘉正（日本石油取締役）、松本正三郎（長岡市会議員）、山谷喜平（見附町長）などがあげられる[4]その後、小林は東京高等工業学校（現・東京工業大学）機械科に入学した。同じく上京して東京高等商業学校（現・一橋大学）に入学し山本留次（当時を代表する紙卸商の１人で現在の新生紙パルプ商事のルーツである博進社の創業者であるとともに設立時より北越製紙監査役も歴任）邸の２階に下宿していた文吉とは頻繁に行き来して交誼をより深めた。学生時代には、北越製紙の起業を準備していた文四郎からの要請に従い、同校の先輩にあたる王子製紙技師の高田直屹から文吉とともに技術面での指導を受けた。

卒業にあたり、小林は製糖会社への就職を希望し、同校は新潟鉄工所への就職を薦めたものの、文四郎や覚張治平からの強い勧めと高田からのアドバイスを踏まえて、北越製紙への入社を決意した。同校での卒業研究は製紙会社の工場の建設および運営をテーマとした。1907年６月に設立直後の北越製紙に入社した。入社後は製紙課機械係（後に製紙部）に配属され、唯一の学卒職員として、技師長の春日馬之助をサポートし、長岡工場の機械の据え付けや組み立て、および抄紙の実務を担うこととなった。

【資料Ｉ－ｉ】は、文吉が「思いいづるまゝ」『北越ニュース』第12号（1956年２月１日発行）のなかで、入社前後の小林について指摘している。同資料は、北越紀州製紙株式会社所蔵である。

【資料Ｉ－ｉ】

（前略）

春日技師長の助手として、現小林副社長が蔵前の高工卒業後は某社に就職がほとんど決っていたのを無理に願って来てもらったようなわけで、当時二十三才の年少気鋭をもって設計工事監督と春日技師長を助けたのであった。社賓星野量平氏も小林氏同様、私の中学の同窓で明治大学を卒業されたところを父からお願いして、四十一年秋から会計係として就任されることとなった次第である。お二人とも、先輩の指導を受ける人もいないところで、初めから責任の地位につかれたのであるから、さぞかし苦労されたことであったと思う。

（後略）

小林は、東京高等商業学校卒業後に専攻科に進んだ文吉が帰郷した時に、両者および1908年に明治大学商科を卒業後に入社した星野量平とともに不完全であった固定資産台帳を２週間かけて作成したことが印象に残っているとふりかえっている[5]。

以下では、北越製紙の経営基盤の拡大・強化はもとより、小林の技術者としてのキャリア形成においても重要となった新潟への進出過程と事業展開について取り上げていきたい[6]。なお、主に活用した資料は、北越製紙の『役員会議事録』である。

文四郎が北越製紙の起業を構想するなかで、当初は洋紙（白洋紙）の生産を目指して、東京から技師を招聘するとともに抄紙機を購入して抄造技術の研究をおこなっている。実際の事業は稲藁を原料とする板紙（黄板紙）の製造としたものの、1908年10月25日の長岡工場の開業式

において、文四郎が「更ニ普通白紙抄機械一台ヲ増設スルハ是本社ノ近キ将来ニ於ケル希望ナリ」[7]と洋紙生産への方向性を明言したことをはじめ、長岡工場での板紙製造および販売体制の構築の途上でも片艶ロール紙の生産計画をあたため続けていたこと、さらに、文四郎は、新潟への進出について、「新潟は燃料としての石炭が長岡よりは得るに易い、動力としての電力も乏しくない、原料となる藁を収集する上からいつても茫漠たる下越の平野を控へてゐる、何れの点から見ても新潟は工場用地としては最良絶好の候補地」[8]と述べており、抄紙における新潟の優位性を早くから認識していたことに留意する必要がある。

その後、長岡工場の生産および原料調達が軌道にのり、日本板紙共同販売所の創設により販売状況がいちおう落ち着いたなかで、1911（明治44）年11月10日の取締役会において、文四郎は抄紙機を１台増設して洋紙の生産に着手したいとの構想を明らかにした。翌12年５月８日の取締役会では、１ヶ月あたり3,000ポンド程度を製造できる洋紙抄紙機を販売費用も含めて予算約10万円で増設することが提案された。これに対して、洋紙の抄造は異議なく可決され、具体的な予算や設備について調査していくことを決定した。翌６月５日の取締役会では、原料の選定や水路・貯水池の建設についても調査していくこととなった。

続いて、同年７月10日の取締役会ではより踏み込んだ議論が展開された。「本社ノ自衛上」、新潟もしくはその周辺に日産５トンの新版１枚取の板紙会社を新設して、北越製紙と新会社とは独立した関係を有しつつも、原料調達や販売に関しては両社の利害が共通するように新会社に対する権利を北越製紙が掌握することにより、「新潟付近ニ於テ設立セントスル者ヲ防止シ、新潟県ニ於ケル板紙製造業ヲ独占的タラシメントノ目的ヲ達セントス其可否奈何」との問題が提起された。これに対して、事業拡張の必要上分工場として設立すべきか、他社が新潟あるいはその周辺部で立ち上げられた場合、北越製紙にとっては明らかに不利となり、防遏ないし対抗するために新会社として設立すべきかの２点に意見が集約され、「何レヲ取ルベキカ頗ル利害関係重大」なため、ひとまず結論をださず、具体案を作成してから再度協議することとした。

ここで、板紙製造の新会社ないし分工場の立ち上げの計画が浮上した主たる要因として、日本板紙共同販売所による共販体制が当初の計画どおり機能しなくなりつつあり、これに対して業界内で確固たる地位をいち早く築こうとしたことを指摘しておきたい。

２ヶ月後の９月21日の取締役会では、共販体制から脱却せずに、新潟付近に「別ニ小ナル製造所ヲ設ケ」て、「実質上北越ノ分身タラシメ、形式上ハ全ク独立ノ体面ヲ有」する別会社の形態をとり、「北越ノ余剰生産物ヲ新工場ヨリ販売」させることを決定した。「板紙界ノ将来並ニ新潟県下ニ於テ将来新設サルベキ板紙株式会社ノ消滅ヲ計ル」と、その意図として業界への影響力の確保と新潟での他社の立ち上げの抑止が明確に示されている。

その２日後の23日に、文四郎と覚張および取締役の山口政治と渋谷善作が新潟に赴き、田村文次郎と文吉の案内で、信越線の沼垂駅周辺や通船川流域および白山浦一帯を調査した[9]。田村文次郎は文四郎の義弟で、1870（明治３）年10月に先代（５代目）文四郎の長男として生まれた。文四郎の意向を受けて新潟へ赴き、1896（明治27）年から新潟市本町八番町にて田村分店として紙卸売業を営業していた。同店は、新潟および下越地方での重要な営業拠点となり、田村家の家業の発展に寄与した。新潟では紙商に加えてキリンビールの新潟県下総代理店となり、1915（大正４）年から33年２月まで新潟商工会議所の常議員を務めるとともに新潟市会議員なども歴任し、新潟の産業界・政界で重きをなしていた[10]。

この調査により、文四郎と覚張は新潟への進出の必要性および有用性を改めて認識し、翌10月11日の取締役会で、文四郎は「是非今日断行しておかぬと、他日悔を貽す事があらうも知れぬ」[11]と新潟進出を強く主張した。当日の議事録には、「当局重役ノ意見ニ従フヨリ道ナキコトナレバ、具体的成案ヲ提出シ決定スベキコトニ決ス」と記録されている。この時点で、新潟への進出はほぼ決定したといってよい。

1913（大正２）年２月22日の取締役会では、分工場にすべきか新会社を立ち上げるべきか再び議論された。出席した山口政治は、分工場は設立が容易で利害が共通することで紛議が生じ

ない一方で、新会社は北越製紙が株式を所有する必要があり、独立した２社の利害関係で法律上の紛議が生じる可能性があることを指摘し、最終的には継続審議となった。翌３月５日の取締役会では、日本板紙共同販売所の状況をみて着手を判断するとした。

その後、日本板紙共同販売所による共販体制の機能劣化が進展するなかで、同年８月10日の取締役会で、文四郎がこれまでの経過を改めて説明し、収支および設計予算書や今後の板紙の需給見通し、新潟付近の水質検査結果などの具体的なデータを示したうえで、新潟に新会社を設立し、北越製紙との関係は「必ズシモ二会社ノ利益共通ヲ目的トセズ、只北越製紙ニ於テ新会社ノ権利ヲ掌握シ、他日分工場ニスルニモ差支ナキ」ものとすることを提起した。これに対して議論が展開された結果、最終的には、①新潟付近に工場を新設、②資本金を15万円（１株50円で3,000株）として北越製紙が全株を引き受け、③名称は別なものとし、当分のあいだ株式会社形態をとり、株主および役員の選定は便宜取り扱う、④新会社の専務取締役の人選は文四郎と覚張に一任の４点を決定した。ここに、新潟において新会社を創設することとその骨格が正式に確定したのである。

同月25日に、中蒲原郡沼垂町字龍ヶ島（現・新潟市中央区）の沼垂駅裏にある日本安全石油所有の6,000坪を石油タンクやレール・煙突等とともに２万7,000円で買収する契約を締結し、北越製紙名義とした。11月21日の取締役会で、機械および設計等の総予算が13万2,662円95銭と報告された。翌12月26日の取締役会では、新会社について正式に決定された。概要は次のとおりである。

・新会社の名称は北越板紙株式会社で、資本金は25万円
・株数は5,000株で、4,000株を北越製紙が引き受け、1,000株は臨時株主総会を開催して希望者に割り当てることとし、希望者がない場合は北越製紙の役員が引き受け
・新会社の役員は北越製紙の現任役員と同様、人数は１名増員、役員は当分の間無報酬
・北越製紙は１株あたり８円、新会社は１株（50円）あたり30円を徴収
・工場の敷地は北越製紙名義のものを新会社へ貸与
・工場の設計をはじめとする準備を着々と進捗

1914（大正３）年１月９日の取締役会で、文四郎と技師長の春日が建設計画を説明した。翌２月７日の取締役会では、35条からなる北越板紙株式会社の定款が決定された。このうち第２条には「当会社ハ板紙並ニ紙ノ製造販売ヲ以テ目的トス」と事業目的が規定され、洋紙の生産が想定されていたのには注目しなければならない。また、全役員が発起人として30株を引き受けるとともに北越製紙持株20株につき北越板紙１株が割り当てられた。

同年７月30日に北越板紙の創立総会が長岡商業会議所で開催された。社長に覚張、常務取締役に文次郎、取締役に文四郎のほか大橋新太郎・渡辺藤吉・渋谷善作・山口政治・小川清之輔、監査役に山田又七・山本留次・山口誠太郎が選任され、北越製紙の役員がそのまま就任することとなった。

北越板紙の設立直後に、小林宗作が北越製紙から技師として派遣され、工場の設計および監督を統括することとなった。土地買収などの実務は、沼垂町助役を務めた大野友吉を事務主任として登用しこれを担わせ、周辺の土地を買い進めた結果、工場用地は１万6,000坪となった。

抄紙機は、設立以前から国産か外国産いずれを選択するか検討をすすめており、1914年５月10日の取締役会で国産を採用すること、続いて６月６日の取締役会では当時業界で信頼を集めていた杉浦鉄工所と５万9,000円で請負契約を締結することを決めた。杉浦鉄工所からは長網67インチで新版２枚取りを購入した。同機は長網であるため、洋紙の場合は菊版（Ａ版）と四六版（Ｂ版）の縦の取り合わせが可能な構造となっていた。板紙市場の共販体制が崩れて自由競争となり採算が悪化した場合には洋紙への転換が可能な機械であった。

蒸解釜２個は新潟鉄工所、叩解機３機は南千住製作所へ発注し、海外からの輸入はボイラーとキャレンダーロールのみであった。長岡工場以上に国産機の導入に積極的となったのである。工場建物は、長岡工場での火災や風水害の経験から、鉄骨・煉瓦造りとした。

1914年11月に工場建物の建設および諸機械の設置が完了し、板紙の生産を開始した。製品は10オンス以下の薄物が中心で、当初から品質は良好であった。しかし、板紙メーカー各社が生

産能力を増大させる一方で、需要は伸びず市況も軟化が続いたため、北越製紙は長岡工場と秋葉原駅の倉庫に約2,000トンの滞貨を抱えた。他方、洋紙は第一次世界大戦によりヨーロッパ諸国からの輸入が途絶したために価格が高騰し始めていた。こうした経営環境の変化に対応すべく、北越板紙で洋紙（中質印刷紙）の生産に着手する意向を固めた。これに関して、文四郎は、「私どもの宿論として、白紙を抄製するにしても、板紙を製造するにしてもなるべく県下の材料を使用して一方、越後の富を増殖せしめつゝ一方、私どもゝ商利を博して行きたいといふのが願望であるので、県下の藁をもつてしては板紙、県下の襤褸をもつてしては白洋紙を抄製するとの方針をとつた」[12]とふりかえっている。

1915年11月11日の取締役会で、翌12月の１ヶ月間に長岡工場で藁パルプの試験抄造をおこなうことを決定し、12月４日から着手された。そして、翌16年１月には画用紙・地券紙の生産を開始した。これが、北越製紙としての洋紙製造の嚆矢である。併せて、白板紙の生産もおこなわれたものの、同月限りで中止された。１月の洋紙の生産高は19万1,479.25ポンド、販売高は15万5,481.14ポンドであった。洋紙の商標には、「オカメ」・「萬代」が使われた。洋紙の品質は、原料が稲藁のため全体として堅く、一面に不溶解性の斑点が残るなど必ずしも十分なものとはいえなかったが、概して販売は順調に推移していった。その後、生産高は16年上期の127万ポンドが下期には約1.3倍の160万5,000ポンド、販売高は上期の101万5,000ポンドが下期には約1.8倍の178万4,000ポンドとなった。

洋紙の生産が軌道に乗るとともに、1916年５月に日本板紙共同販売所の解散が決議されて自由販売となるなかで、北越板紙を別会社として存立させる必要性が低下していき、北越製紙に買収ないし合併させるべきとの気運が高まった。

1917（大正６）年１月10日の取締役会で、資本金25万円のところ31万500円をもって買収することを決定した。北越製紙は翌２月10日に臨時株主総会を開催し、北越板紙の買収および取締役の１名増員と文次郎の就任が可決された。これを受けて、北越製紙新潟工場と改称し、文次郎が取締役として常勤し、小林が工場主任、大野が事務主任として引き続き実務を統括することとなった。北越板紙の清算の結果、6,784円71銭が北越製紙の資産に繰り入れられた。

新潟工場としての最初の設備増強は、砕木パルプ（GP）設備の導入であった。洋紙の生産能力の拡大に伴い、藁ないし襤褸パルプのみでは不十分であり、品質も必ずしも満足できるものではなかった。こうしたなかで、顧問技師の堀越寿助（王子製紙王子工場工務係長や上海近郊の竜華で創設された奏弁竜章造紙公司の工場の建設と操業に携わった後に山本留次の斡旋を受けて1909年４月に臨時技師として招聘され翌10年１月に就任）が、支配人の文吉（1915年９月就任）に対して、新潟は北海道から原木の搬入が容易であること、砕木機の国産が開始されていたことから砕木機の新設を提案した。これを受けて、文吉は文四郎および覚張の諒解をとりつけ、15年秋から準備に入った。砕木機は約7,000円で杉浦鉄工所から、400馬力の電動機は奥村電機商会から購入した。原木のトドマツは、北海道の西南海岸部から新潟港や阿賀野川河口の松ケ崎浜村（現・新潟市東区）を経て帆船で持ち込まれた。動力は、飯豊川水力発電所を新設した直後の中野平弥・四郎太（後に新潟交通社長などを歴任）が率いる新潟水電から１銭１厘/kwhの廉価で供給を受けることとなった。これらの調達は、文次郎の尽力により実現できた。

建設工事は1916年４月27日に完成して翌５月から稼動を始めた。同年上期の『第弐拾壱回報告書』は、「工者ノ熟練ト共ニ来期以降低廉ナル砕木紙料ヲ供給シ得ル見込ニシテ、今日ノ時局ニ際シ聊カ意ヲ強クスルニ足ルト言フベシ」（４頁）とその将来性を強調している。当初から品質は良好であり、生産量は16年上期の42トンから同年下期に447トン、３年後の19年上期には718トンまで拡大した。木質パルプの自製は、王子製紙系企業以外では業界初であり、北越製紙の経営発展における一大画期となったのである。

新潟工場では、1918（大正７）年７月に、100インチの長網ヤンキーマシンを増設した（２号機）。同機は、17年１月10日の取締役会で長岡工場に設置することが決定していたものの、同年３月10日の取締役会で、文吉が原料の関係により新潟工場に設置するほうが有用であると

提案し、予算額の13万円から16万円への増額とともに変更することが決まった。製造は加藤鉄工所で、中国輸出用の有光紙と国内用のロール紙（包装・カレンダー・書道・謄写版向け）を生産した。さらに、18年５月10日の取締役会では､86インチの長網抄紙機の増設が決定した（３号機）。予算額は貯水池建設も含めて29万6,000円とした。同機は山沢鉄工所に発注して翌19年３月に完成して、印刷紙や更紙を中心に雑種紙も含めて生産した。これらの増設は文四郎の宿年の願望であったとされる。

次に、長岡工場の増設と市川工場の新設および社内組織の拡充について述べていきたい[13]。

長岡工場では、1917年に抄紙および紙料部門の改良に着手され、42インチの乾燥筒（ドライヤー）を従来の21本から予算５万円で14本増加することを決めた。工事は杉浦鉄工所に発注し、プレスパートの元起なども含めて同年10月31日に完成した。これにより、生産能力は月産650トンに増加した。翌18年７月10日の取締役会で、予算15万円での１機増設が決定された。1919年11月５日に、山沢鉄工所製の67インチの円網抄紙機を増設して（２号機）、14オンス以下の薄物を生産した。新潟工場の１号機と同様の抄幅で、新判縦３枚取りであった。この他、1918年に煙突１基、19年には蒸解釜１基を増設している。これらの事業計画の策定は文吉が主導したものであるが、小林が技術面を下支えしたのはいうまでもなかろう。

文四郎は、長岡および新潟に続いて、首都圏での板紙工場の建設を構想していた。その理由としては、①稲藁が新潟県内と比べて必ずしも高価ではないこと､②消費地に立地すれば直送･直売が可能で大幅なコストダウンができることがあげられる。特に鉄道や河川舟運の利便性が高い東京近郊に着目した。これを受けて、東京高等商業学校在学中から土地勘があった文吉が、1918年の春から初夏にかけて東京府南葛飾郡金町村（現・葛飾区）の三菱製紙中川工場の周辺や千葉県東葛飾郡松戸町（現・松戸市）などの江戸川河畔を調査した結果、同郡行徳町大洲（現・市川市）が最適であると判断した。同地では１万坪程度の土地が確保可能であり、江戸川の水質も抄紙には適合的であった。そこで、文吉は関係者を通じて、市川町の有力者の１人で京成電気軌道（現・京成電鉄）の取締役などを務めていた筧貞蔵に接触を試み、文四郎とともに交渉を開始した。当初は筧は必ずしも積極的ではなかったものの、両者が熱心に要請した結果、筧はこれを受け入れ、自ら先頭に立って総武線市川駅近傍の約１万坪を確保した。後に文吉は、文四郎の真摯かつ誠実な姿勢にうたれて態度を変えて全面的に協力したと筧が語ったと当時の状況をふりかえっている[14]。

1918年７月10日の取締役会で、総予算75万円で建設することが決定された。しかし、同年11月に第一次世界大戦が終結し、その反動で商品価格が大幅に下落したため、建設の延期を余儀なくされた。翌19年４月以降景気が好転するなかで、同年９月12日の取締役会において、板紙から白紙屑とパルプを原料とする白洋紙（上質印刷紙）の生産へ計画を変更し、総予算を100万円に増額して抄紙機２機を設置することを決めた。翌10月11日の取締役会で、86インチ長網抄紙機を山沢鉄工所へ発注すること、利根発電から300キロワットの電力供給を受けることを決定した。蒸解釜２基とボイラー１基は月島機械へ発注している。工場建設の実務全体は川越仁三郎（書籍商である覚張家での勤務を経て1909年に入社し後に長岡工場長などを歴任）が担当し、設計は小林が指揮して田代田三郎（後に新潟工場次長などを歴任）が担った。建築は、12月５日の取締役会で、市川町の小林栄吉に請け負わせることとし、防火・防災面に配慮して新潟工場と同様の煉瓦造りとした。工場主任には、文次郎の婿養子である佐次郎を起用することを1920年１月10日の取締役会で決めた。同年３月10日の取締役会では、86インチ長網抄紙機を大文洋行を通じてイギリス・グラスゴーのミルネ社へ１万5,500ポンドで発注することを決めた。また、筧の尽力により、工場と市川駅間の専用側線用地を取得することができた。

1920（大正９）年12月25日に、山沢鉄工所へ発注した抄紙機（１号機）の運転が開始された。22年１月にはミルネ社へ発注した抄紙機（２号機）の運転に着手され、「白象」･「天女」･「山鳥」･「スター」との商標での白洋紙（上質印刷紙）および専売局へ納入する煙草口紙の生産を進めていった。こうして長岡での板紙、新潟・市川での洋紙と多品種化と生産能力の向上が進展したのであるが、工場および設備の新増設における小林の役割は大きかったといえる。

この間、1920年１月20日の取締役会で、文吉の提案により、本社と長岡・新潟工場の職制の混同を改善するとともに両工場のマネジメントを強化するために、本社に経理・営業・技術の３部をおき部長制を敷き、両工場に工場長と工場次長をおくことを決定し、人選は文四郎と覚張へ一任とした。小林は新潟工場長と技術部長の兼務が命じられた（技師長職は廃止）。営業部長と長岡工場長は文吉が兼任し、経理部長と長岡工場次長に星野量平、新潟工場次長に大野友吉が起用された。市川工場は、田村佐次郎が21年１月に次長、24年２月に工場長となった。なお、星野の足跡と活動に関しては別稿に改めることとしたい。

【資料Ⅰ－ⅱ】は『北越ニュース』第16号（1956年６月15日発行）、【資料Ⅰ－ⅲ】は同紙第18号（1956年８月15日発行）に掲載された田村文吉執筆の「思いいづるまゝ」である。新潟への進出のプロセスとエピソードが記されている。このなかで、小林の活動と成果が強調されている。同資料は、北越紀州製紙株式会社所蔵である。

【資料Ⅰ－ⅱ】

「北越製紙序の巻」
－その六－　北越板紙の創業と合併－

私の入社前に現在の新潟工場を創設すべく敷地物色のため重役諸公が沼垂に出かけ、台風に会った珍談は先に申し述べたとおりであるが、その後旧安全石油の敷地確か六、七千坪を獲得し、これに借地及び新規土地を買い足し一万六、七千坪の敷地となし、会社は別会社で出発、北越板紙会社と称し、資本金は二十五万円、その八割は北越製紙が持ち残りの二割も大部分北越の株主に割当て持ってもらい、大正三年会社の成立を見るに至った。社長には覚張治平氏、常務には新潟の田村文次郎氏が当り、工事の設計監督は少壮三十才の現会社副社長小林宗作氏が重任を果したのであった。

新潟に姉妹会社を造ったのには色々意味があったようである。父専務の語るところによれば第一に北越が造らなければ誰かが競争会社を造る恐れがあったこと、第二に板紙の景気は非常に変動が多く製品過剰のため激烈な競争を誘致するのでその場合は藁とボロとで洋紙の製造に転向可能をねらったこと（これは機械の巾が六十七吋であって黄板の新版二枚取りであると同時に洋紙の場合には四六判菊判Ａ判Ｂ判の縦の取り合せができるようにしくまれてあった）等の理由からであったようである。

機械は全部和製で杉浦鉄工所に注文し抄紙場だけは不燃性の煉瓦造りであった。当時、杉浦から派遣された設計者の松尾岩太君は、その後会社に就職され、小林技師長を助けてその後の引き続く設計工事監督に挺身され、近年まで在職されたことは諸君の知るところである。また、地元では今は亡き大野友吉君が用地の買収、その他万般の事務長として苦労をされたのであった。今もそうだがその当時の工場はいわゆる湿地であるため、昼でさえ蚊が多く夜分製図中の皆がいぢめられ、小林宗作氏のごときはこれがためマラリヤに犯され数年間悩まされたように記憶する。

かくて北越板紙は、大正四年十一月より運転を開始し、当初は長網による黄板紙を抄造したのであるが、なにぶん板紙は前述のごとき大不況時に際会する一方、洋紙は欧州方面よりの輸入杜絶により各方面にわたり景気となったので、初めから第一に予期されたようにボロと藁とをもって中質印刷紙の抄造に転向することになり、そもそも我社の洋紙製造の起源となした次第である。

洋紙抄造のために旧梅津製紙にいた青木豊槌君が招聘されて来て、当社としては全く未経験な洋紙の抄造、それも原料としては旧時代のボロ、藁を使用したのであるが注文は薄物が多い関係もあって、六十七吋の機械で月産ようやく二十一、二万封度であるから、今から見ると夢のような話である。王子の樺太大泊で、ＳＰを初めて造り始めたのもそのころの大正五年であって煮えそこないのゴミだらけのパルプを封度五銭ほどで売りつけられて始末に困ったこともあった。五年の秋ころに、当時としては、はなはだ突飛であったが砕木機を入れることにし、翌六年四月から運転を開始し、木材はすべて北海道の南西岸から、松ケ崎、あるいは新潟の帆船で大部分角材として移入し、パルプ品質は頗る優秀なものをつくることができた。ここにこれを特記する次第は当社が現代式パルプの製造に王子系以外の会社として先鞭をつけたことが当社のこの後の発展に極めて貢献するとこ

ろ大なりしことを知ってもらいたいためである。

業界情勢も第一次欧州戦争の結果非常の変化を来たし、新潟工場は洋紙として出発する方針も確定したので北越板紙をあえて別会社として存置する必要も認めなくなったので、大正六年二月の北越製紙の総会でこれが合併を認め、形式は二十五万円の資本である北越板紙の財産全部を三十一万五百円の現金をもって買収するの形をとり、北越板紙会社は解散して新潟工場と改称し、前常務の田村文次郎氏が常勤重役として担当し、小林宗作氏が工場長となり大野友吉氏事務担当の陣容を整えた次第である。

【資料Ⅰ－ⅲ】

第三編　第一次世界戦争の巻
－その二－　新潟工場の拡張（一）

今日の新潟工場発展の基礎を造ったものは、洋紙としての原料の自給のため大正六年四月に砕木パルプの設備を始めたことにあると思う。前述の如く板紙より白洋紙に転換するに当って、父田村専務の考えはボロと藁を使用する、すなわち在来日本の各製紙会社の大部分がとり来た方法であった。ただし藁はその後も印刷局、九州の小倉製紙（十条小倉工場）、九州製紙（現在の十条の坂本工場）等で相当長く使用し、いわゆる官報用紙、小倉の卜印、坂本工場の月印、雪印等の中質印刷紙として市場に現われておった。しかしボロは特殊の上質紙にのみ使用される様になり、段々その使用が減り、欧州よりの輸入のサルファイトパルプによって代替されるようになっていった。

新潟工場としては藁を釜で蒸し、釜下のチェストで晒し、ボロも同様石灰蒸したものをビーターで切り、之を晒して下のドレーナーに溜めておき、配合ビーターに混ぜて紙をすいた。会社の当時の代表的の商標はオカメ、万代で、紙質は藁のために堅さはあるが、そのために一面に細かい不溶解性のスペックスを残して甚だ感心せざるものであった。それでも欧州から全然紙が輸入されない時代であったから大威張りで売れ、かつ相当の利益はあったのであるが何分にも能率があがらない、そこで前に述べた顧問を願っていた堀越寿助氏に色々意見を聞いている内に、新潟は北海道からの船便もあるから砕木機を入れて見たらどうか、幸今は和製で砕木機も出来るからとの話が出た。早速杉浦鉄工所の老主人に話をすると簡単に引受ける、値段も確か四本ピストンで一台七千円位との話しであったので直ちに見積を持って帰岡し、役員諸公に図ったところが大賛成であった。現在の六号機のあるあたり、旧一号機と並べて急造の木造建物をたてモーターは京都の奥村電機へ四百馬力を注文した。

原料の椴松は、幸に北海道のセタナイ方面から相当量毎年新潟へ入荷があって、値段も皮削の角材で石弐円程度（当時は才で計算）であったので集材に何等の困難もなく、電力は今の中野四郎太氏の厳父平弥氏が新潟電気会社を経営しキロ壱銭壱厘、不定時ならば八厘程度に勉強されるというので契約を了し、万事順調に進行した。これ等は新潟常勤取締役の田村文次郎氏の極めて勝れたる商才と、一意専心社業に尽される誠意によって運行され、これを助けて小林現副社長が息継ぐ間もなく次から次へと設計から工事の監督に当られた精進によるものと言わねばならぬ。

さて大正六年四月砕木機の工事は竣功したが、肝腎の英国から輸入さるべきニューカッスルストンの砥石が入らぬ。ところが三井物産が前に入れた独逸製の石がある、之を使ったらというので饑じい時の食を選ばずで、さっそくそれを購めて試運転をやったところが、当方使用に慣れないためもあったかも知れぬが第一回目には即座に石が割れてカバーを吹き飛ばし危く小林さんも怪我をするところであったようの椿事が出来ました。後できくとこの石はどこでも引取人のないようの粗末なものを押しつけられたのであったが、外に代りが入る迄の間、残った三個をいたわれいたわり使用した様に覚えている。

序でながら砕石用の石の歴史を申すと、前陳の独逸の石は別として一般に使用されたのは英国のニューカッスル石で水中から切り出すとのことであった。我社に永年ポーリットスペンサーの製紙用毛布を納入していたシングルトン・ベンダ商社の取次によるものであった。その内和製で九州天草方面の石が相当使われたのであったが、値段は安かったけれど品質に不同があって英国製に及ばなかった。その内に独逸

製の人造石が輸入され、使用期間も延びかつ割れる様なこともなく、かつ価格も手頃になって各会社に愛用される様になり、当社でも砕木係長の渡辺誠太郎君が造り始めたことは諸君の知るところであるが、終戦後は更に一段の進歩を遂げ、アランダム人造石となり驚くべき耐久性を示しかつ能力も非常に優秀となって今日に至っている次第である。

Ⅱ　田村文四郎・覚張治平・田村文吉に対する追想

【資料Ⅱ－ⅰ】は、1932（昭和７）年11月に、関魚川の編著、岩瀬直蔵の発行による田村文四郎の伝記・追想録である『田村文四郎翁』、【資料Ⅱ－ⅱ】は、1933（昭和８）年12月に、同じく関魚川の編著、岩瀬直蔵により発行された覚張治平の伝記・追想録である『追憶　覚張治平翁』に寄稿された小林宗作による追悼記である。入社前後から両者に接し始めた小林が、両者の事業に取り組む真摯な姿勢と温和かつ剛健質実な人格をふりかえっている。小林の筆致から、両者の終生一貫したスタンスを読み取ることができる。

【資料Ⅱ－ⅲ】は、田村文吉が1963（昭和38）年６月26日に急逝した後に「故田村会長追悼特集号」として同年８月１日に発行された『北越ニュース』に掲載された小林へのインタビューの一部である。長岡中学校在学時から60年以上にわたり公私ともに深く関わってきた小林による文吉のエピソードの紹介は貴重である。高齢に達し、後進に道を譲るべく1958年に取締役相談役（60年には取締役を退任）に退いていた小林であったが、往時の記憶は明確であり、文吉への強い追慕の念が見てとれる。

【資料Ⅱ－ⅰ】

翁は信行一致の人であつた

北越製紙株式会社新潟工場長
小林宗作

今回わが社創業満二十五周年を迎へ、記念事業の一として初代専務取締役故田村翁の伝記を編纂さるゝ事は、私ども一同の最も熱望してゐたところであります。殊に永年御厄介になりました不肖としては、懐旧の情に駆らるゝが儘に思出の一端を述べさせていたゝ゛く事は、無上の光栄と存じてをります。もつとも会社興隆の礎石であらるゝ故翁に対しては､感謝としても、追懐としても無限であります。美しい無辺の追憶の宝庫に対して思出の筆を取る事は、恰ど黄金の山より石塊を掘り出す結果に終はる事であらう事を、惧れてをりますがそれにも拘はらず強ひて語りたいと思ふのは、温容未だ目のあたりに浮んで追慕の情更に切なるものがあるからであります。

故翁の為人は信行一致でありました。特に信仰による信念の強さ、その強い信念がその儘行為となつて現はれてまゐります。一身をもつて凡べての手本を示す事は真に難いものでありまして、故翁の天成の美徳と信じてをります。従つてその及ぼす影響も著大でありました。翁の心血が化身した精励と、節約とは今尚工場精神として光り輝いてをります。

故翁の信行一致は一方、また事業にも現はれてをります。事業は翁にとりては信仰であつた。しかも熱烈火を吐くが如き信仰でありました。恰も名将が戦場に在る時の姿であります。従業員に対していつてをられた会社と身を共にせよ、との教訓は取りも直さず御自身会社に向つて行はれたところであります。覚張常務が扁を書いてツクリを残すな、との御教へと共に深く肝銘してゐるところであります。また非常に節約の人でありました。社用にて私が金沢へお伴して古機械を見に行つた事がありました。が御常宿がありますのにその日は、特に駅前の商人宿に泊られました。御馳走もなく、サービスもひどく御気の毒に思ひましたが平然として満足されてをられました。

これは私の当惑した話でありますが、私が機械係を拝命してゐた時の事で御案内して工場を廻りますと、石炭の塊が散らばつてゐるのをステツキの先きで、コツ～掘り出して拾はせられたものです。一寸の無駄も省かれたのです。一方注意が非常によく行き届いてをられました。

また煙突の煙を見てはあの黒い煙りはと、よくお話しになりましたがその後二十余年の今日漸く煙りの出ない設備が出来たのです。

これは当惑した別の例でありますが、常にい

はれるナジデスであります。この問には全く困つた。どう申し上げてよいのかさつぱり見当が付かず、ドギマギして了ふのが例でありました。その代りお問に叶ふ答が出来た時は胸がすくやうな思ひがしたものであります。

或時ランカシア、ボイラーのフリユーのアダムソン、ジヨイントにクラツクの入つた時事務所に呼ばれ、ボイラーをよく壊はしてくんなすつたと只一言、私もどういふてよいやら呆気にとられて不注意のお詫も申上げず、目をパチクリ引き退つたやうな事もありました。

或年新年にお宅に招かれた事がありました。充分に御馳走を頂いて各自の隠芸といふ段に、御自身早速朗々御得意の追分を謡はれましたが、実に堂に入つたもので、お若い頃仕入に信州通ひの道中に口吟まれた悠々、自然の風調のある感慨豊かなものでありました。

何事にも御熱心にて、思ひは岩をも通す概の人でありましたと同時に用意周到で、一意精進なさつたのであります。覚張常務と相俟つて専心努力、わが社を造り上げられましたのは従業員の私等としましてはその宏大無限の遺徳、遺業に対して敬慕申上げても申上げ切れないのであります。

（97 ～ 100頁所収）

【資料Ⅱ－ⅱ】

翁の風格

新潟　小林宗作氏　談

二十余年の長い間翁の御訓育を頂きましたので、今も尚御在世の時と同じく御風貌といひ、御音声といひ、生けるが如く目に見え耳に聞ゆるのに、もう七回忌を御迎へせねばならぬとは、今更ながら時の流れの早いのに無量の感慨を禁ずることが出来ません。私ども常に考へてをりますのは、偉いお方は必ずこゝらこそ、その人であるといふはツきりしたところがあります。熟々翁を御追憶申上げるときも、あれこれ沢山の御風格の中にこれこそ翁であるといふところのものは、非常に厳格の人であつたといふことであると思ひます。俗に謂ふ、きまりの良い方の御手本と申すべきお方であります。

翁のきまりの良いことは公私ともによく現はれてをりまして、私ども従業員に対し常に、その日になすべきことは必ずその日の中になせ、決して明日に廻はすなと訓示されてをりました。そしてまた御自身躬をもつて行はれてをられました。お店の方からもよく聞いてをりましたのには、翁は公私の御用は勿論、宴会で夜更けて帰へられても必ず残務整理をなす。しかもそれが一日も欠かされたことがなかつたさうで、それを伝へ聞く私ども従業員としましても弛み勝ちの心の緒を締め直して、御手本に適ふやうにと念ぜざるを得なかつたわけであります。

尚翁は厳格の中にもなつかしみの多い方でありまして、御世辞は決して申されませんでしたが何でも思ふが儘に申上げることが出来ました。威ありて猛からず、しかもその温情味の中にも必ず注意が行届かれて、仕事上のことを申上げるときも、最後に必ず一言間違ひなきかを尋ねられました。私どもは只その一言の中にも、私どもに対する御信頼の気持ちと、周到の注意を促す二つの御気分を体得して、尚一層の責任を感じたのであります。

こゝに丁度、翁の注意深かつた短い挿話があります。

或る時お伴をして京都に参つたことがありました。長岡の紳商の方三四名と同宿されたので話は直ちに一決、嵐山見物に出掛けました。青藍を流したやうな保津川の清流を眺め、大悲閣に上り抹茶を啜りなどして夕方近くになつたので、某茶亭で夕食を攝りました。食前先づ一浴といふので一同澡室に行くと、その湯舟の深さが四尺余もある上に内側に上り段もないので、いきなり飛び込んで横に倒れるもの、顱頂まで没せるもの、さては湯を呑むものなどもあつて大失策を演じました。そこへ暫くして翁は参られました。偶まこの時翁は眼鏡を外してをられたので、必らずやヒツくり返へらるゝに相違ない。真面目なる翁の澡室の顛倒、その姿はユーモア以上の看物であらうと、茶目気たツぷりで一同待ちかまへてをつたものだ。ところが翁は例の周到振りを発揮して易々と入浴。そして平然と上がつて行かれたので一同は呆然、裏切られたやうな感に打たれたのであつた。かゝる些細の事柄の中にも現はれてゐる翁の注意深さは、工場経営の上には一層行届いて現はれ、今でも従業員は、翁の残された整理と注意の御精

神に日々鼓舞されてをるのであります。

今日の社運の隆昌に想ひ到るとき、何よりもその礎石がシツかりしてゐたことに対して、満腔の感謝をさゝげてをるのでありますが、曠野に城廓を築くやうな創業時代の大切な時期に、翁の如き用意周到の人を得たのは当社の幸福であつたといふべきでありませう。初代専務田村翁と共に永久に記念すべきことで、胸像の建立されたのも決して偶然ではない。本年七回忌に当りまして、私のこの心からの思ひ出で話にも現はし切れない、無限の追憶をもつて翁の徳を偲ぶ次第であります。

（162 ～ 164頁所収）

【資料Ⅱ－ⅲ】

（前略）

－会長は早くから人づくりに努力してこられたようですが、

相談役　会長のモットーは皆さんもご存じの「活人活物」であったわけです。これは、修養団に入られる前からのものでした。

－会長のお人柄について、

相談役　さきにお話ししたように、とにかく、友誼に厚く、困っている人の面倒をよくみられたということですね。

これは簡単なようであるが、実行となるとなかなか容易なことではないと存じます。

終世この気持ちで通されたということは、やはり偉かった人だと尊敬しております。

－会長に学ぶべきことは、どんな点でしょうか

相談役　仕事はもちろんのことですがね、趣味に於ても、それにかかる前に必ず予備知識を勉強され、その後は一途にそれに取組み最後まで突きつめるという、一貫した研究心と努力の人だったということです。

たとえば、北越製紙の事業には最後まで献身努力を傾けてこられたことです。

一つの事業以外には手を出さないという信念を持っておられました。

もっとも、現在は時勢も違ってきて、いろいろ多角経営をしなければ発展しないというようになってはきましたがね。

たまたま郷里の長岡が戦災に遭って、その復興が強く望まれた当時、名誉市長に推されたのが一つのきっかけで、代議士参院を二期十二年勤められ、その間、大臣にもなられたように、政界入りされ､多忙を極めておられたような時、それでも、会社のことは寸時も忘れられることなく､以前と同じように勤めておられたことは、よくそのお人柄を裏書していると思われます。

－会長の趣味について。

相談役　多芸、多趣味でおられましたね。中でも最もよくされたのは謡曲でしょう。

謡曲は一橋時代から始められたもので、その芸の深さは師匠格であったときいております。

新潟県でも、会長の右に出る人はチョットないんじゃないですか。また、俳句もよく作っておられたようで、その作品も相当の数らしいです。それらは良い想い出となることでしょう。そのほか、余暇があれば囲碁もよく打たれたようです。

晩年にはだいぶ、健康に気をつけておられたようでしたが、それまでは相当お丈夫だったと存じております。

酒は若いときから余りおのみにならなかったが、食事はかなり召上る方でした。

－お二人でゆっくりお話になった最後は。

相談役　今年の一月、例の大雪で汽車が何日も不通になって、小甚旅館に足止めになっておられた時に、お伺いし、いろいろとお話を承ったり、私もしゅじゅ申上げたりしたのが、今から想えば、ゆっくりお話できた最後でした。

今後とも、私ども及び従業員のみなさんも、会社のためにそれぞれに全力を尽してゆくのが、会長の冥福につながるものと信じます。どうか、しっかりがんばって下さい。

（ききて　新潟　小林一道）

Ⅲ　同時代での小林の紹介と評価

【資料Ⅲ】は、1941（昭和16）年６月に、中村牟都雄が編纂し、中央経済情報社が刊行した『興隆日本の財界人　下』に採録された、小林宗作に関する叙述である。

もとより、北越製紙における小林の存在は製紙業界ではそれなりに認知ないし認識されていたものの、北越製紙が地方を基盤とする企業であり、小林が創業家ないし一族ではない専門経営者あるいは技術者であるがゆえに、同書のような全国レベルかつ産業界全体を網羅したタイ

プの文献で取り上げられることは稀であり、貴重な叙述であることは間違いない。

ただ残念なことに、事実関係には明らかな誤謬が複数個所で見られる（「昭和十年に当社技術部長に招聘せられて入社したのが製紙業界入りの発端」、「以来取締役となつて重役に列し、所謂工場長の要職に就いた」、「入社して僅に五ケ年余」など）。それゆえ、小林に対する誤解が広がった可能性は否定できない。しかし、北越製紙において技術面を統括していた小林の役割や功績、さらにそのパーソナリティーに対する評価は基本的には妥当なものといえる。事実関係の正誤を識別したうえでとの留保は必要であるが、当時の小林を知るうえではフォローすべき資料といってよい。同資料は、明治大学附属中央図書館の所蔵である。

【資料Ⅲ】

本邦製紙界の一偉材

北越製紙株式会社常務取締役　小林宗作　氏

近代産業の中にあつて、国民文化の大動脈である製紙業は、近代文化の第一線を歩むものである。他の種々の産業は、文化発展の一般的でしかあり得ないとしても、紙の産業の盛衰と運用は、直接に我等の精神とその活動を制約する恐ろしい偉力を有するものである。現代の輝かしい文化は、紙と印刷のお蔭であることは、茲に説明するまでもない。

而して本邦製紙界を見るに、大王子製紙は別として、北越製紙をその長たるものに挙げなければなるまい。この北越製紙の社賓的存在として、小林宗作氏がある。即ち常務取締役として新潟工場（長脱カ：引用者）たる氏は、当社首脳部中の智将として欠くべからざる人材なのである。

氏は明治十八年に新潟県に出生。同四十年に東京高工を卒業し、工業家として発足して三十年。昭和十年に当社技術部長に招聘せられて入社したのが製紙界入りの発端である。以来取締役となつて重役に列し、所謂工場長の要職に就いた。かくして先年常務に昇進し、今や世間では、「北越製紙に過ぎたるは小林である」と評される位、名実共に当社に君臨してゐるが、一面氏は稀に見る人格者で社の上下一致の信仰を一身に集めてゐるのである。新潟県人中心の会社である当社に在つて、氏は代表的な新潟実業家である。

氏が入社して以来は、当社技術方面は目に見えて向上改善され、氏の善庭健闘に依つて当社の前途は光明に輝いてゐるのである。氏は良心的な学究の人であり、常に精神を傾注して仕事に当るといふ真摯さは、無言の教示となつて部下の産業精神を昂揚せしめたのである。入社して僅に五ケ年余であるが、不屈不撓の信念と、温情と理解とを以て抱擁する氏の愛情の通り一遍のものでないことは、氏に接するものの何人もが感受することであり、心からの尊敬を一身に集めてゐるのも当然であらう。氏の如きは天成の得難き徳望家と言はねばならない。現在は常務として業務一切を総覧し、また今日尚技術部長の要職に在り、当社の主力たる新潟工場を担当するなど、氏の身辺は多忙である。

北越製紙の歴史は古い。即ち、前から三十五年前、明治四十年五月に創設されたもので、過去を振返り見ると、雨の日、風の日の足跡が、新しく浮かび上がつて来るのである。当社発展過程を辿るとき、忘れることの出来ないのは前社長田村豊太郎氏、同じく重役田村文次郎等の一族である。之れ等の人々は今は二代目にその地位を譲り、豊太郎氏嗣子文之助氏は現在常務として将来を嘱され、文次郎氏長男貫一氏も重役として活躍してゐる。之等新進気鋭の少壮実業家を配して、老練達識の小林氏の存在するは、当社輝く歴史に千鈞の重みを加へてゐる。

因みに当社資本金は一千三百十五万円、最近の業績はとみに好調を辿つてゐる。特筆すべきは、当社が樺太に小田洲炭坑を所有してゐることで、現在所要素の八割を供給してゐる。石炭自給は大きな強みとなつており、当社の前途は洋々たるものがある。

小括

紙幅の都合から、本稿では小林宗作の技術者ないし企業人としての最初期の活動を考察するに止まった。新潟工場の建設と操業に率先垂範して取り組んだことは、小林の技術者さらには管理者ないしマネージャーとしてのスキル・ノ

ウハウの蓄積と進化に大きく寄与するところとなった。これとともに、草創期の北越製紙において、新潟での事業基盤の確立はもとより、技術力や生産能力の向上に小林の果した役割は決定的に重要であったと評価できる。

1920年代から30年代前半にかけてのいわゆる「慢性不況」による経営環境の悪化のなかで、小林は新潟工場をはじめとする各工場の生産効率の向上や前途を見すえた設備の新増設に技術面で主導した。さらに、30年代後半以降の人絹パルプ製造への進出（37年５月の北越パルプの設立）に深く関与することとなった。

この間、1935（昭和10）年７月に取締役に選任され、40年７月には常務に昇格した。この当時、「県下各工場の製造部門を統帥してゐる技術畑出身の現業重役」、「新潟工場長をはじめ、沼垂、附船の両工場長を兼ね縦横に快腕を揮つた」[15]と紹介されている。

戦後の1950（昭和25）年７月には副社長に昇格し、社長の田村文之助のもとでいわばCOO（最高執行責任者）の役割を担い、「北越製紙今日ある恩人の一人といわれる至宝的存在」[16]と評されている。

これらの小林の具体的な事績については、別稿にて改めて検討・考察することとしたい。

注

[1] 中林家や西川弥平治の事績については、山田良平『西川弥平治伝』故西川弥平治殿遺徳顕彰会、1961年を参照した。

[2] 北越銀行行史編纂室編『創業百年史』株式会社北越銀行、1980年。

[3] 小林宗作氏「田村さんの若き日を偲ぶ」北越製紙株式会社社内報『北越ニュース』＜臨時号＞1963年８月１日発行。北越紀州製紙株式会社所蔵。

[4] 藤田士郎編『創立八十周年記念発行　会員名簿　昭和二十六年九月現在』長岡高等学校同窓会、1951年、84 ～ 87頁。

[5] 注３と同じ。

[6] 新潟への進出過程と事業展開については、拙稿「北越製紙の企業成長と田村文四郎・覚張治平」篠崎尚夫編著『鉄道と地域の社会経済史』日本経済評論社、2014年の323 ～ 329頁の記述に加筆・修正を加えたものである。

[7]「北越製紙株式会社開業式式辞」北越紀州製紙株式会社所蔵。

[8] 関魚川編『田村文四郎翁』岩瀬直蔵、1932年、68頁。

[9] この調査に関しては、『北越ニュース』第13号、1956年３月15日発行分に掲載された田村文吉の「思いいづるまゝ」のなかで「新潟工場敷地を求めて」と題して記されている。

[10] 日本風土民族協会編輯・発行『越・佐傑人譜』1938年、た17頁。

[11] 注８と同じ。

[12] 前掲『田村文四郎翁』70頁。

[13] 以下の叙述は、筆者が分担執筆を担当した北越製紙株式会社北越製紙百年史編纂委員会編『北越製紙百年史』同社発行、2007年の78～79頁に加筆・修正を施したものである。

[14] 田村文吉「思いいづるまゝ」『北越ニュース』第19号、1956年９月15日発行。

[15] 松下伝吉『人的事業体系・化学工業篇（上）』中外産業調査会、1941年、414頁。

[16] さかいせいぎ（坂井正義）『新潟人物読本』記念事業会、1953年、135頁。

【注記以外での参考史料・文献】

＜北越紀州製紙株式会社所蔵史料＞
『役員会会議録』第壱・弐號。
『報告書』および『営業報告書』各期。
年史編纂委員会「五十年史参考綴」
「社史資料」
「経験談集録」（1957年１月）
＜刊行文献・論文・記事等＞
王子製紙株式会社販売部編纂・発行『昭和十二年版　日本紙業総覧』1937年。
鈴木尚夫編『現代日本産業発達史１２　紙・パルプ』現代日本産業発達史研究会、1967年。
成田潔英『洋紙業を築いた人々』財団法人製紙記念館、1952年。
成田潔英『王子製紙社史　第三巻』王子製紙社史編纂所、1958年。
北越製紙株式会社『増資目論見書』1949年４月20日、1950年７月20日、『社債目論見書』1950年12月25日、『新株発行目論見書』1954年４月１日、明治大学附属中央図書館所蔵。
北越製紙株式会社『有価証券報告書』各期、明治大学附属中央図書館および国立国会図書館所蔵。
松本和明「西蔵王『山崎家文書』にみる山崎晃・

正の足跡と活動（Ⅰ）」長岡郷土史研究会『長岡郷土史』第45号、2008年５月。

【付記】

本稿は、本学が平成25年度に文部科学省から「地（知）の拠点整備事業」として採択された『長岡地域〈創造人材〉養成プログラム』の取り組みの中の27年度の「地域志向教育研究」におけるテーマ「地域企業の経営発展と企業成長および企業者活動についての研究－北越紀州製紙のケース－」による成果の一部である。

【謝辞】

本研究をすすめるにあたり、北越紀州製紙株式会社常勤監査役などを歴任された小林多加志氏をはじめ、北越紀州製紙株式会社洋紙事業本部新潟工場事務部長の金川貴宣氏や同社関係者の方々には資料提供・調査で一方ならぬ御配慮を頂いている。また、株式会社田村商店代表取締役会長の田村巌氏には、製紙業の歴史と現状に関して日頃から御教示頂いている。特記して感謝申し上げる次第である。

末筆となるが、これまで史料整理に御協力頂いた地域連携研究センターに在職されていた近藤瑞恵さんにも改めて御礼申し上げることとしたい。